

アーザードのアブル・ファズル伝について

近 藤 治

はじめに

アクバル時代の偉大な歴史家であり、かつ融和主義の立場をとる思想家でもあったシャイフ・アブル・ファズル(Shaikh Abu'l-Faḡl 1551-1602)に、私はかねて注目し機会あるごとに触れてきた⁽¹⁾。本稿では、19世紀後半にウルドゥー語による多くの著述を残し、20世紀初頭ラホールに没したデリー生まれの詩人・文学者にして歴史家でもあったムハンマド・フサイン・アーザード(Muḥammad Ḥusain Āzād 1910年没)の書『ダルバーレ・アクバリ』(*Darbār-e Akbarī* アクバル宮廷、以下この表記を使用)のなかに収められているアブル・ファズル伝を紹介することに主眼をおいている。アーザードは著者の号(takhalluṣ)であり、「自由」を意味する。同じくアーザードの号で愛称されたイスラーム学者でインド国民会議派の議長を2期務めた人物が有名であるが、いうまでもなく別人である。

以下においては、アーザードのアブル・ファズル伝の紹介に先立って、著者の略歴について簡単ながら述べておきたいと思う。次いで『アクバル宮廷』の公刊事情についても多少説明を加えることとし、そのあとでこの書に収められたアブル・ファズル伝を紹介する予定である。なお、ペルシア語やウルドゥー語において名詞と名詞、あるいは名詞と形容詞との間の関係符号として使われるイザーファト(エザーフェ)の符号は、デリー・サルタナト時代やムガル朝時代などの古典的ペルシア語(文語文)では-i(母音の直後では-yi)で表わし、ウルドゥー語や現代ペルシア語では-eで表わすこととする。

1 ムハンマド・フサイン・アーザード略歴

最近公刊された我が国最初の本格的なウルドゥー語の辞典によると、アーザードはウルドゥー詩人・文学者として紹介され、主著としてウルドゥー詩人伝・文学史を叙した『アーベ・ハヤート』(*Āb-e Ḥayāt* 生命の水、1880年)が挙げられている⁽²⁾。彼の没年は1910年とされているが、生年は示されていない。手元にあるウルドゥー文学史の書を繕いてみても、確かに彼の生年を明示しているものは少ない。そのようななかにあっても、強いて生年を挙げるとすれば1830年説と1833年説とがあるように思われる⁽³⁾。いずれにしてもアーザードが1830年代の前半、ムガル朝第16代皇帝アクバル2世の時代に、その膝下の都デリーで生まれたことは間違いのないようである。

当時のデリーは、衰えたりとはいえムガル朝の伝統的文化がなお旺盛に息づいている町であり、ここで幼年時代から青年時代を送ったアーザードは、多くの知識人階層の子弟に広く認められていたように、アラビア語とペルシア語を父親から教えられた。父ムハンマド・バーキル(Muḥammad Bāqir)は北インドにおけるジャーナリズムの開拓者といわれ、デリー最初のウルドゥー語紙『デリー・ウルドゥー・アフバル』(*Delhī Urdū Akhbār*)を発行していた。やがてアーザードは1847年ごろデリー・カレッジのアラビア語科に入学し、同学の友人たちから多くの刺激を受けた。この時期に父の友人の詩人ザウク(Shaikh Muḥammad Ibrāhīm Zauq 1789-1854)と交流し師事した。人生の早期から文学に見覚めていた彼は、文人の師友と交わりながら、デリー・カレッジを修えた後は父のウルドゥー語紙の発刊に協力し、自らも記事を盛んに書いていたようであった。

そのような彼に驚天動地の激変をもたらしたものは、1857年5月に勃発した大反乱であった。ムガル朝第17代皇帝バハードゥル・シャー2世が反乱軍によって全インドの主権者に推戴されたことによって、デリーは最激戦地と化した。同年9月デリーがイギリス側に陥落すると、反乱への直接的、間接的協力者の狩り出しと弾圧は凄惨を極めた。アーザードの父も刑死し

た。アーザードは身の危険を感じ、恩師ザウクの詩集の草稿のみを携えて家族とともに逃避行し、ラクナウ、デカンのハイダラーバードを放浪した後、ラホールに落ち着いた。

パンジャブ地方は1849年にシク王国の支配から英領に併合され、ラホールはその中心地であった。この地でアーザードは1864年教育局に採用され、初等・中等教育用のウルドゥー語やペルシア語の教科書の執筆に従事した。以後、彼の才能が認められてイギリス当局からイラン、アフガニスタン方面に2度派遣されたり、ラホールのガヴァメント・カレッジのアラビア語教授に任命されたり、パンジャブ州政府から優れた学者に贈られるシャムスル・ウラマー (shams al-'ulamā 学者たちの太陽の意)の称号を受けたり、またパンジャブ協会(Anjuman-e Panjāb)を通して詩会(mushā'ara)の組織化と普及に努めるなど、学者・文人としての順調な活動の道を歩んだ。しかしながら、青年期以来の激変に耐えながらなされた心身の酷使に加えるに、過労と緊張、イラン方面への過酷を強いる特派、娘の死などの衝激が重なったため、彼の健康は次第に害され、晩年には精神的平衡の失調に悩まされた。それでも執筆活動を中断することなく、1910年1月22日に永眠した。⁽⁴⁾

アーザードの著作集や全集の類は、寡聞にしてまだ承知していない。彼の代表的な作品としては次のようなものがある。すなわち『キサセ・ヒンド』(*Qiṣaṣ-e Hind* インドの物語)、『アーベ・ハヤート』、『ナイーランゲ・ハヤール』(*Na'irang-e Khayāl* 思想の新動向)、『スハンダーネ・フェールス』(*Sukhandān-e Fārs* ペルシアの詩人たち)、『ナシーバト・カー・カーラン・プール』(*Naṣibat kā Kāran Phūl* 天命の花)、『ディーワーネ・ザウク』(*Dīwān-e Zauq* ザウクのガザル集)、『ナズメ・アーザード』(*Naẓm-e Āzād* アーザード詩集)、『アクバル宮廷』、『ニガーリスターネ・フェールス』(*Nigāristān-e Fārs* ペルシアの画室)、『カンデ・パールシー』(*Qand-e Pārsī* ペルシアの砂糖)、『ジャンワリスターン』(*Jānwaristān* 動物の国)などである。彼の主著とされる作品が『アーベ・ハヤート』であることはすでに触れた通りであるが、ウルドゥー文学史としてはじめて本格的に書かれたこの書は、「ウルドゥー文学の研究は『アーベ・ハヤート』をもって嚆

矢とする」というように位置づけられている。⁽⁵⁾

アーザードは詩人としてもさることながら、『アーベ・ハヤート』のような散文において傑出していた。散文の文体にはとりわけ注目され、何人にも追隨不能といわれた⁽⁶⁾。ただし大作『アクバル宮廷』については評価の分かれるところがあって、ムハンマド・サーディクのというような辛辣な批判もある⁽⁷⁾。アーザードの評伝や作品論は多岐にわたって数多いようであるが⁽⁸⁾、詳細についてはここでは控えておきたい。

2 『アクバル宮廷』の刊本

『アクバル宮廷』の初版は、1898年ラホールから石版印刷で公刊された⁽⁹⁾。この書は全文850ページを越える大冊である。私はこの書の必要部分を1987年10月大英図書館所蔵本より複写して利用することが可能となった。扉の書名のすぐ下には副題として次のように書かれている。「インドの皇帝ジャラルッディーン・アクバルと彼の宮廷の偉大な貴顕たち、すなわちバイラム・ハーン、アリー・クリー・ハーン・シースターニー、ムヌイム・ハーン、ラージャ・ビールバル、アブル・ファイズ・ファイジー、シャイフ・アブドゥル・カーディル・バダーウーニー、シャイフ・アブル・ファズル、ラージャ・トーダル・マル、ラージャ・マーン・シング、ミルザー・アブドゥル・ラヒームその他の人物の興味深い事蹟」。著者については、名前の直後に「ガヴァメント・カレッジ、ラホールの元アラビア語教授」と付記されている。またこれに続く編者については、「サイド・ムムターズ・アリーが著者の未整理の原稿を編集し、内容を充実させるために70人の貴顕や名士たちの事蹟を追加記述して増補した」と記されている。

私の手元には、1947年にラホールで刊行された『アクバル宮廷』の石版本もある⁽¹⁰⁾。この本は本文816ページ、序文(muqaddama) 6ページ、目次2ページから成るが、初版の編者による増補部分は削除されている。扉の最下段には、第6版(chhaṭā edīshan) 2000部と記されているので、初版刊行後この第6版刊行までに4回の版(印行)の重ねられていたことが分かる。

そのうちの第2版が1910年の刊行であったことは、この第6版にそのまま収められている第2版の序文の日付によって明らかである。

さらに1988年刊の影印版も幸いに手元で見ることができるようになった⁽¹¹⁾。この書は初版と同じページ立てをとる石版本である。しかし筆跡は一見して別筆であることは明瞭であるので、別版であることは明らかである。この書も冒頭に第2版の序文を採録しているので、第2版の影印本であるかというところ、そうではない。巻末のコロフォン(奥付)には、「ムハンマド・バーキル(Muḥammad Bāqir)、グジャラート・ガヴァメント・カレッジ、西暦〔19〕37年12月3日」と記されているからである。これによって1988年刊の影印版は、1937年版を影印したものと考えて間違いなさそうである。以上をまとめてみると、『アクバル宮廷』は1898年の初版、1910年の第2版、1937年版、1947年の第6版の印行が確実であり、それまでにさらに2度にわたる印行のあったはずであった。さらに1988年の影印版は1937年版に拠ったものである、ということになる。

ところで第2版に付された序文は、「1910年8月3日付、謙虚な僕(khāksār)であるアムリトサルの下級判事(muṣṣif)ムハンマド・イブラーヒーム(Muḥammad Ibrāhīm)」と記して結ばれている。第2版の編者となったイブラーヒームによるこの序文は、初版の編者サイイド・ムムターズ・アリーの編集方法に対する批判に満ちている。なぜそのような問題が生じたかといえば、先に指摘したように著者アーザードはすでに初版の刊行以前から心身の不調に悩まされており、原稿の印刷と校正等は編者に委ねていたからである。そして、第2版の刊行される年の1月にアーザードはすでに死去していたのであった。ムムターズ・アリーもイブラーヒームも共に長くアーザードに師事した高弟であったようだが、このように彼の大作『アクバル宮廷』の編集方法をめぐって厳しい意見の対立があったのである。だがそのことが本稿で扱うアーザードの筆になるアブル・ファズル伝の内容に影響することは全くないので、この問題に深入りすることなく、本題のアブル・ファズル伝の紹介に移ることにしよう。

以下においては、『アクバル宮廷』の初版を底本とし、そのなかのアブル・ファズルに関する記述部分(463-508ページ)を訳していくことにする。

訳出に当っては、1947年の第6版のアブル・ファズル伝の記述部分(570-625ページ)と1988年の影印版の当該部分(463-508ページ)とをそれぞれ参照し、底本の印刷の不鮮明なところを確認しながら進めていくことにした。訳文中のパーレン()には原語の表記や簡単な説明、言い換えを記し、キッコー〔 〕には原文にない補足語を記している。原文中に僅かに使用されている括弧はブラケット〔 〕で示した。改行は原文に従った。また原文中の見出し語は、訳文中ゴチックで示している。『アクバル宮廷』の劈頭には、初版で156ページ、第6版で188ページに及ぶ堂々たるアクバル論が収められている。これは単なるアクバル伝を越えた、アクバル時代の社会文化史といえる叙述となっているように見受ける。折があれば、いずれこの部分についても何らかの形で紹介してみたいと思っている。

3 アブル・ファズル伝冒頭部紹介

ヒジュラ暦958年ムハッラム月6日(西暦1551年1月14日)は〔スール朝〕イスラーム・シャーの時代であったが、この日にシャイフ・ムバーラクの家では祝賀の挨拶がしきりに換わされていた。しかし礼儀作法上、静かにするよう目配せされた。そうなのだ！行儀と知恵を形にした赤ん坊は、お腹から生まれ出でて母の膝でしばし眠っていたのだ。父〔のシャイフ・ムバーラク〕は自分の恩師の名に因んで、息子にアブル・ファズルと名付けた。だがこの子は恩寵(fazl)と秀逸(kamāl)の点において父の恩師よりもさらに天高く舞い昇っていった。栄耀栄華についてまた何をさらに言い足すことがあろう。シャイフ・ムバーラクの事蹟についてはすでに述べたので、どのような辛酸と災厄のうちに〔この子が〕育てられたかを想起していただきたい。〔彼の〕修学時代はいつまでもどん底の不幸と、心中の苦悶と、そして敵対者たちによる呵責とに堪え忍びながら過ぎていった。けれどもその癒し難い痛手は、彼にとって日々新たな課題と修練の実践となった。こうして辛抱と忍耐を続け、適切な方途によって暮らしていたが、〔やがて〕アクバルのような偉大な皇帝の大臣の地位にまで到達した。彼は父ムバーラクの裳裾(庇護)のなかで育ち、青年期の輝きを発出させ

た。そして父の獨台から火種を移し、知性の提灯を光り輝かせた。この当時、マフドゥームル・ムルク (Makhdūm al-Mulḳ 国の聖者の意、‘Adbullāh Anṣārī の有した称号) やサドル・アッスドゥール (Ṣadr al-Ṣudūr 司法長官 シャイフ・アブドゥンナビーの有した職能) その他のウラマー (イスラーム学者たち) は、皇帝に関わる権限のみならず神に関わる権限さえももっていた。そのうちに彼らの高圧的な命令と頑迷な教令 (fatwā) が広く行き渡った。彼の学問修得の熱意と奮励読書の興味は増大していった。幸運が勢いをえようとしており、また現在が未来を引き寄せようとしていた。こうした時、ライヴァルたちを消沈せしめるのにどうして躊躇してられようか。

アブル・ファズルは『アクバル・ナーマ』の第3巻(この巻は独自に *Ā'in-i Akbarī* 『アクバル会典』の名で一般に知られる) を書き、その結語 (khātima) で自分の初期の教育の様子をかなり詳しく述べている⁽¹²⁾。そのなかで、彼以外の実に多くの人々の事柄も明らかにされようとしているが、こうした人々の事柄はすべて聞いてみる値打ちのあるものである。それぞれの人物の事蹟について明らかに記したのと同じように、自分自身の事蹟についても包み隠すことなく書き記したこの著者(アブル・ファズル)の手に、願わくば尊敬のキスを与え賜え。人間は、とどのつまり人間である。人間には、さまざまな時にさまざまな〔予期せぬ〕事柄が起こるものである。しかしながら善良な性質の人々は、それらからさえも善行の教訓を得るものである。鬼の性質をもった人間は姿が歪み、泥沼に巻き込まれていくものである。

初期の事蹟

1歳になるかならないころに、神の慈悲を受けた彼ははっきりした言葉を話しはじめた。5歳のときに全能の神は才能の窓を開いてやった。他の者には恵まれていないような物事の理解力を持ちはじめたのである。15歳のときに、尊父の知識の出納係(書庫の貸出係)並びに意味の宝石(書籍)の見張り役となった。そして書庫に居たまま座り続けた。

彼は身の修練をめざして絶えず心を沈潜させていた。そして世のなら

わしから気持を遠ざけていた。しばしば、ならわしが全く理解できないことがあった。父は自分の方式でもって知識と学問の魔法(mantar マントラ)をかけてやった。それぞれの学芸分野について1冊ずつの小冊子を作り、それを覚えさせた。彼の知識は増えたが、学問の流派についてはその意味するものがよく解らなかつた。あるときは全く理解することができず、あるときは疑問が行く手を遮った。またしゃべることには運が向いていなかった。〔彼の体の〕どこかにある障害が口ごもりさせていた。暗記にも長けていたが、それを朗唱することは苦手であった。〔朗唱のときに〕人前で突然涙を流すことがあり、そのことで自分自身を責め苦しめた。[『アクバル会典』第5部で彼はもう一度このことについて書いている]。知識人たちが暗唱を課するのは、彼には不公平に見えた。こうして孤独と流浪に親近感を抱いた。彼は学校(madrasa)で知識を広げることになった。夜になると人気がない所に出て行き、寂れた路地に面した官庁を探し出して、貧しい出納係たちから勇気を物乞いした⁽¹³⁾。

この時期に彼は一人の学生に友情を抱いた。しばらくの間、彼の考え方はその学生の考え方に近くなった。幾日も経たないうちに、かの友達と話し合ったり同席したりするため、心は学校の方へと引かれていった。塞いだ心と不安な気持ちは一度に霧散した。神の摂理のおかげで、気分は晴れ上がり、別人のようになった〔私はすっかり変わってしまった、と彼は述べている〕。四行詩。

寺院に来たりてそこに住みつき
たちまちにして酒の盃廻されり
かの酔いが自ずと我を腑抜けにし
我を奪い取りて別人にせり⁽¹⁴⁾

哲学の真理が天蓋を開け放った。見たこともなかった書を読むことによって、さらに啓発された。彼には人並みはずれた天賦の才能があり、また神の恩寵が降り注いではいたけれども、さらにその上に偉大なる父が一方ならぬ支援を与え、教育の継続が途切れないようにしていた⁽¹⁵⁾。そのことが彼の性格を穏やかなものにする大きな要因となった。10学年次までに彼はよくしゃべり、他人とよく話すようになっていた⁽¹⁶⁾。〔勉学に没頭

して] 昼と夜の区別さえ気付かなかった。空腹か満腹かどうかとも分からなかった。一人でいるときも他人と一緒にいるときも、嬉しいときも悲しいときも、神に関する事並びに知的な交流のほかは何事も解ることができなかった。肉体のことが気になる友人たちは、驚き入っていた。なぜなら〔彼のもとには〕2、3日食事が届いていなかったからである。彼は知識に飢えていて、〔食事のことは〕全く気にならなかったのだった。友人たちは、彼が聖者になったとの確信を募らせた。人は習慣のゆえに、驚いたり驚かなかたったりする。そうでなければ、病人はその関心事が病気との闘い(闘病)にあるので、どうして食事に無関心でいられようか⁽¹⁷⁾。それについては誰も驚きはしない。このように、心は何らかの行為と内部において結びつき、他のことはなにもかも忘れさせてしまうとしても、何も驚くことではない。

多くの書物がつぎつぎと暗記されていった。古い紙片に記されていた諸学の高尚な内容は損耗していても、彼の心中のページのなかで輝きを増しはじめた。今や彼の陽気さが、その帳の内から姿を見せることはなくなった。また幼小期の低みから知性の高みへと昇り切ることもなかった。この時以来、古の学者たちに対する異議が心に浮んだ。彼は少年期の自分を思い浮かべ、わが心をじれったく思わざるをえなかった。彼にはこのような経験がそれまでにはなかった。気持が高揚することがあっても、それはすぐに抑えられてしまった。学生時代のはじめのころ、批判の気持が生じてきたとしても、それならば、ムッラー・サアドウッディーン(Mullā Sa'd al-Dīn)⁽¹⁸⁾とミール・サイイド・シャリーフ(Mīr Saiyid Sharif)⁽¹⁹⁾とにどう対処すればよいのか分からなかった。あるとき突然、ムタッワル(*Mutawwal*)にたいするホージャ・アブル・カーシム(Khwāja Abu'l-Qāsim)の著した疎注書がもたらされた⁽²⁰⁾。この書のなかに、かの(アブル・ファズルがかねて指摘していた)批判点の存在することが明らかとなった。〔これを知って〕誰もかれもすっかり驚き入ってしまった。人々は〔彼に対する〕否定的姿勢を改めるようになり、これまでとは違った見方で彼に接しはじめた。今や光を採り入るための小窓が見つかった。そして学問の扉が開け放たれた。アブル・ファズルが〔父の学校で〕教えるようになった当初のころ、イ

スファハーニー (İsfahāni)⁽²¹⁾の注釈の手写本があり、その半分以上が白蟻によって食われていた。使い物にならないものと人々は諦めていた。彼は先ず台無しになった部分を切り取り、〔別の紙で〕継ぎ当てをした。曙光が差して物皆姿を現してくる所に机に向かい、文章の始めの部分と終わりの部分を熟視した。しばらくの間沈思熟考し、それからそれぞれのところの意が通じるように用意した。それに従って文案を考え、文章を当て嵌めて、それを〔継ぎ当てた紙に〕清書した。そのうち日ならずして、件の注釈の完全本も見つかった。両者を突き合わせてみたところ、2、3箇所同義の別語があった。そして3、4箇所非常に意味の近い語が用いられていた。これを見て人々は驚愕してしまった。アブル・ファズルは〔学問に対して〕愛着の心を深く込めていけばいくほど、心は晴れやかになっていった。20歳のとき、彼の自立をよしとする吉報が〔父から〕届いた。そのことで彼の心はいっぱいになった。以前の当惑がまた頭をもたげてきた。学問と芸術のきらびやかさの上に、青年期の熱狂の激しさと喧騒がその裳裾を広げていった。世界を映す、学識と見識の鏡が彼の手にはあった。新たな狂気の沸騰が耳に響き始めた。彼はあらゆる仕事から身を引こうと努めはじめた。その時、英邁なる皇帝(アクバル)が彼に思し召しをかけられ、彼を〔孤独という〕隠れ家の隅から引っぱり出された。

アブル・ファズルは父ともろとも、敵対者たちの手によって非常に大きな心の痛手を受けた。最後に受けた攻撃は、最も激しいものであった。それについての何がしかの説明は、〔この書のなかの〕シャイフ・ムバーラクの事蹟について述べたところでなされている⁽²²⁾。シャイフ・ムバーラクは天命に苦しみ、一度ならず自分のモスクのなかで(自分の限られた世界のなかで)しばし蟄居していた。この清朗な老師は、宮廷に対してついで興味をもったことはなかった。しかしながら有望な若者たちを、幸運は座視させておくことはしなかった。彼らの心のなかに、完璧な申し立てをしてみたいという情熱が湧いた。それは当然のことであった。太陽と月が自らの輝きをどうして止めてしまうことがあろう。光り輝く宝石をどうして投げ捨てることがあろうぞ。こうしてヒジュラ暦974年(西暦1567年)にシャイフ・ファイジー (Shaikh Faiḏī アブル・ファズルの兄)が皇帝の

拝謁を賜り、アブル・ファズルの上にも神の賜物が下ったのはヒジュラ暦981年(西暦1574年)、20歳(23歳の間違い)の時であった。彼がこの世において、この賜物をいかに如在なく引き受けたかを次に見ていこう。

おわりに

以上でアブル・ファズルの幼少年期から青年期にかけての伝記的記述は終わっている。これに続く部分は、いよいよアブル・ファズルがアクバルの宮廷に出仕し、目覚ましい活動を果たしていく記述へと進む。今回紹介したアブル・ファズル伝冒頭部の短い記述によっても、彼が人並みはずれた尋常ならぬ素質をもっていたことが余すところなく示されている。そして溢れるばかりの才能に恵まれた者が少年期、青年期に通過せざるをえぬ深刻な反問や苦悩についても、詩人特有の見事な筆致で描かれている。

アーザードの文体の何よりの特徴は、簡潔・簡明で引き締まった文章を小気味よいテンポで繰り出していくところにある。冗長な晦渋さとは無縁である。ムガル朝時代の文化の伝統を色濃く引き止めているので、彼のウルドゥー語にはペルシア語の語彙と表現が圧倒的に多い。しかしデリーやラホールの洗練された都市文化のなかで発展したヒンディー語的要素も程よく用いられている。アーザードの知性に深く染み込んでいるペルシア語的教養のなすところか、彼のウルドゥー語には主語の省略されている場合が非常に多い。

アーザードはこのアブル・ファズル伝を書く際に、一体どのような文献に拠りながら進めたのであろうか。豊富な文献が所蔵されていたはずのデリーの実家は、1857年勃発の大反乱ですっかり放棄されてしまったが、第二の故郷ラホールの彼の家にもやがて立派な書庫が付置されたようだ。そこにムガル朝時代関係の文献が数多く揃えられ、それらを参照にしながら彼が大著『アクバル宮廷』を執筆したと推測して、まず間違いのないであろう。今回紹介したアブル・ファズル伝の部分は『アクバル会典』末尾に付されたアブル・ファズルの自叙に多く拠っている。そのことは、双方の文献を照らし合わせれば瞭然である。そのことがあったためであろうか、それと

も著者アーザードの感興が昂まったためであろうか、「アブル・ファズルは」と書くべきところを「私は」と書いているところが一度ならずあった。特に、アブル・ファズル自序でも紹介されているイスファハーニーの虫食い本の復元に関する記述のところがそのようになっている。このように書かれているところは、訳文ではすべて「アブル・ファズルは」とか「彼は」というように訂正しておいた。

『アクバル宮廷』執筆の参照文献としてアーザードの家蔵本のことを指摘したが、しかし実際の執筆段階になると、彼と同時代の学者たちがすべてそうであったように、アーザードはすでに自分の頭に収め込んでいる知識と記憶を繰り出しながら一気に書きおろしていったに違いない。従って記憶のあいまいさや思い違いがあれば、誤記がまれに生ずることも避けえないところである。今回紹介したところの最末尾で、アブル・ファズルがアクバルのもとに仕官するようになったときの年齢を20歳としているのは、そうした例の一つであろう。このような誤記は、この時代の文献を読む限り回避的なものであるので、訂正しながら読んでいくしか仕方がない。

アーザードは文学者、詩人、文学史家、ペルシア語・アラビア語学者として著名であり、また歴史家的センスも非凡であった。彼のアブル・ファズル伝は、今日の歴史研究者たちの専門化された個別研究からは得られないような歴史的に深く広い展望を与えてくれるものと期待しながら、この続きを読んでいこうと思う。

注

- (1) 例えば、近藤 治『ムガル朝インド史の研究』（東洋史研究叢刊之六十一）京都大学学術出版会、2003年、第1、第2、第9、第11の各章および別章1を参照。
- (2) 加賀谷寛『ウルドゥー語辞典』大学書林、2005年、1、13ページ。
- (3) Muhammad Sadiq, *A History of Urdu Literature*, London: Oxford University Press, 1964, p. 288は1830年説を、またAli Jawad Zaidi, *A History of Urdu Literature*, New Delhi: Sahitya Akademi, 1993, p. 238は1833年説を取っている。ただしShamsur Rahman Faruqi, *Early Urdu Literary Culture and History*, New

- Delhi: Oxford University Press, 2001, pp. 16, 17ではアーザードの生卒年が(1830-1910)、(1831-1910)というように不統一の形で記されている。
- (4) Sadiq, *ibid.*, pp. 288-303; Zaidi, *ibid.*, pp. 238-240; Faruqi, *ibid.*, pp. 16-17, 47-48 ; Ram Babu Saksena, *A History of Urdu Literature*, Allahabd, 1927, reprint, New Delhi: Asian Educational Service, 1990, pp. 219-222, 274-279; T. Grahame Bailey, *A History of Urdu Literature*, 1928, reprint, Delhi: Ashok Vihar, 1979, p. 87; Ralph Russell, *The Pursuit of Urdu Literature: A select history*, London and New Jersey: Zed Books, 1992, pp. 121-128.
- (5) Zaidi, *ibid.*, p. 240.『アーベ・ハヤート』の刊本には幾種かがあるであろうが、ここでは次の2種を挙げておこう。*Āb-e Ḥayāt*, Calcutta: ‘Uṣmāniya Book Depot, 1967; *Āb-e Ḥayāt*, ed. by Tabassum Kāshmirī, Lahore: Maktaba-e ‘Āliya, 1990. また英訳には次のものがある。Frances W. Pritchett and Shamsur Rahman Faruqi (trs.), *Ab-e Hayat*, New Delhi: Oxford University Press, 2000.
- (6) Saksena, *op. cit.*, p. 279.
- (7) 「彼の2番目の著作である『アクバル宮廷』は失敗作である。この書は非常に扱いにくいものであり、しかも悪いことに文体のマンネリズムにひどく冒されているので、読んでいても楽しいものではない」。Sadiq, *op. cit.*, p. 291.
- (8) 比較的早い時期に出たものとしては、例えばウルドゥー語のAslam Farrukhī, *Muḥammad Ḥusain Āzād: Ḥayāt aur Taṣānif*, 2 vols., Karachi, 1965があるようであるが、私は未見。cf. Russell, *op. cit.*, p. 267, n. 1.
- (9) Muḥammad Ḥusain Ṣāhib-e Āzād, *Darbār-e Akbarī*, ed. by Saiyid Mumtāz ‘Alī, Lahore: Dār al-Ishā’ at-e Panjāb, 1898.
- (10) Muḥammad Ḥusain Ṣāhib-e Āzād, *Darbār-e Akbarī*, ed. by Shaikh Mubārak ‘Alī, Lahore: Shaikh Mubārak ‘Alī Ṭājir-e Kutub, 1947.
- (11) Muḥammad Ḥusain Āzād, *Darbār-e Akbarī*, Lahore : Sang-e Mīl Publications, 1988. この書は、大阪外国語大学(当時)ウルドゥー語科客員教授タバッスム・カーシュミーリー (Professor Tabassum Kāshmirī)氏より1989年12月に寄贈を受けた。
- (12) 厳密に言えば、『アクバル会典』第5部に収められた結語の、さらにその後のアブル・ファズルの自序(nubzī az aḥwāl-i muṣannif)が用意されており、そのなかで彼の一家や自身の来歴が詳しく述べられている。
- (13) 当時アブル・ファズル一家は、ムガル朝の都アーグラに住んでいた。

- (14) この詩は、『アクバル会典』第2巻末尾に付されたアブル・ファズルの自叙のなかにあるベルシア語の詩をそのまま引用したものである。第3句中の *ān* が *ū* に変更されているが、句の意味は全く同じである。 *Ā'm-i Akbarī*, text, ed. by H. Blochmann, 2 vols., Calcutta: Bibliotheca Indica, 1872-1877, Vol. II, p. 277.
- (15) 父シャイフ・ムバーラクはアーグラで学校(塾)を聞いていたので、アブル・ファズルはそこで早期から教育を受けた。
- (16) 10学年次はアブル・ファズルの15歳のころに当たる。このころから父の経営する学校の書庫(図書館)の貸出係の役割を引き受けていたことが「初期の事蹟」冒頭部の記述によって分かる。
- (17) インドの伝統医学の重要な療法の一つは、食事療法であった。
- (18) サアドウッディーン・マスウード・ビン・ウマル・アルタフターザーニー (Sa'd al-Din Mas'ūd b. 'Umar al-Taftāzānī 1322-1390)。ホラーサーン地方出身。ティムール治下のサマルカンドで没。ムッラー (学者)は敬称。文法論や修辞学、神学、クルアーン注釈など多方面の分野で多くの著作を残す。本文中、すぐ下に出てくるムタツワルは彼の著した書である。 *Encyclopaedia of Islam*, new edition, Vol. X, pp. 88-89.
- (19) サイイド・シャリーフ・アリー・ビン・ムハンマド・アルジュルジャーニー (Saiyid Sharif 'Alī b. Muḥammad al-Jurjānī 1339-1434)。イランのアスタラーバード生まれ。ティムールのイラン侵寇の際、サマルカンドに連行され、そこで前注のサアドウッディーンに会い、ムタツワルの疏注書を書いた。晩年イランのシーラーズに戻り、そこで没。哲学・論理学・言語学などの著作がある。ミールはアミール (amir 長) の短縮形で、尊称。 *Ibid.*, Vol. II, pp. 602-603.
- (20) ムタツワルは、ジャラールッディーン・マフムード (Jalāl al-Din Maḥmūd b. 'Abd al-Raḥmān al-Qazwīnī al-Shāfī 1338年没) が著した文法と修辞学の書 *Talkhīṣ al-Miftāḥ* (鍵鑰的摘要) に対して、注(18)で紹介したサアドウッディーン・アルタフターザーニーが書いた有名な注釈書の略称。この注釈書に対して、本文にあるようにホージャ・アブル・カーシム (Abu'l-Qāsim b. Abū Bakr al-Laisī al-Samarqandī) がさらに疏注書を著した。cf. *Ā'm-i Akbarī*, English tr., Vol. III, by H.S. Jarrett, Calcutta : Bibliotheca Indica, 1894, p. 444, n.1. 前注で指摘したように、サイイド・シャリーフにもムタツワルの疏注書がある。

アーザードのアブル・ファズル伝について

- (21) イスファハーニーと称される人物には何人かの著名人がいる。そうした人々のうち、ここではムハンマド・ビン・ダーウード・アルイスファハーニー (Muḥammad b. Dāwūd b. 'Alī b. Khalaf al-Iṣfahānī 909年没)か、あるいはイマードウッディーン・ムハンマド・アルイスファハーニー (Imād al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-Kātib al-Iṣfahānī 1125-1201)かのいずれかが考えられる。前者は法学者、文法家で、主著に宮廷恋愛詩集(*Kitāb al-Zahra*)があり、後者は名文家、歴史家として有名で、12世紀のアラブ詩集の編書もある。ここでは、イスファハーン出身の後者である可能性が高いと思われる。*Encyclopaedia of Islam*, Vol. III, pp. 744, 1157-1158.
- (22) *Darbār-e Akbarī*中のシャイフ・マバーラクに関する記述は、初版、第2版とも328-358ページ、第6版は407-445ページ。